

国営事業所の農地・水・環境保全向上対策への支援・協力について
 Supporting and cooperating to promote the policy for conservation of farmland,
 water and environment in rural area, by national land-improvement project office

宗岡 一正 中井 雅 佐藤 章悦 須田 隆嗣
 (Muneoka Kazumasa)(Nakai Masashi)(Sato Shoetu)(Suda Ryuji)

1. はじめに

最上川下流沿岸農業水利事業所(以下事業所という)では、平成19年度から本格的に実施された「農地・水・環境向上対策」に関して、平成17年度からこれまでの3年間、同対策の推進に関して支援協力してきた。これはこれまでの活動と今後の支援・協力に向けての留意点を整理したものである。

2. 事業所が実施した農地・水・環境保全向上対策への支援・協力の概要

年度	項目	回数・内容等
17	<ul style="list-style-type: none"> 関係市町長へ制度説明 関係土地改良区へ制度説明 関係機関の委員会の開催 フォーラムの開催 	<ul style="list-style-type: none"> 1～2回 2～3回 H18.2.8 国営事業所会議室 H18.3.1 庄内町響ホール 約200名参加
18	<ul style="list-style-type: none"> モデル地区の活動に参加 ワークショップ研修の実施 関係機関の委員会の開催 フォーラムの開催 山形大学との共同研究 NPO等へのインタビュー 地域資源マップの下敷きを作成配布 	<ul style="list-style-type: none"> 3モデル地区、延べ12回参加 H18.9.12～14 延べ110人参加 H18.11.14(幹事会)12.5(委員会) H19.2.20 酒田市公益文化センター 約200名参加 庄内地域のモデル地区の活動調査 地元小中学校、大学、NPO 受益地内小学4年生及びイベント参加者を対象に1,000枚配布
19	<ul style="list-style-type: none"> ワークショップ研修の実施 関係機関の委員会の開催 山形大学との共同研究 NPO等へのインタビュー 活動組織の見学会受入れ 	<ul style="list-style-type: none"> H19.11.29～12.1 延べ190人参加 H19.11.19、H20.2.13 開催 庄内の活動組織の状況調査 公民館活動、JA、地元高校 草薙頭首工を案内、2回 65人

3. 受益地域の農地・水・環境保全向上対策への取組み状況

山形県は全国都道府県の中でも北海道に次ぐ全国第2位の取り組み面積となっているが、その

東北農政局最上川下流沿岸農業水利事業所(Mogamigawa-Karyu-Engan Irrigation Project Office, Tohoku Regional Agricultural Administration Office, M.A.F.F.)キーワード：農地・水・環境保全向上対策、国営事業所、ワークショップ

山形県の中でも庄内地域は79.5%と非常に高いカバー率(農振農用地面積に対する取組み面積)となっている(平成19年12月時点)。また、庄内の中でも当国営事業の受益地に関してはほぼ100%のカバー率(東北農政局調べ)となっている。

4. 事業所が行う支援・協力の留意点

1) 今はまだ地域での話し合いが十分とは言えない状況

最初の一步と言うべき地域での話し合いが必ずしも十分という段階まで達していないことが活動組織のリーダーを集めたワークショップの意見から見て取れた。特に非農家との連携という部分で悩みを抱えている活動組織が多いようである。

2) もうしばらくは関係機関のリードが必要

平成19年度は初年度で、前述のように地域での話し合いも十分とは言えないところもあり、事務処理などで手一杯、自発的な活動への取り組みはこれからというところであろう。従って、もうしばらくは関係機関のリードが必要である。

3) 地域の皆さんが相談しやすいのは市町と土地改良区

山形県庄内支庁が実施したアンケート(回収率43%)によると、「共同活動における各種相談先はどこを考えていますか?(複数回答可)」という質問に対し、市町が81%、続く土地改良区が52.3%、農協が35.4%となっている。

4) 関係機関の連絡調整は今後も非常に重要

事業所が実施してきた支援協力は、県・市町・土地改良区・大学ほかの協力を得ながら行ってきたものであり、今後も同様である。また、それぞれの機関が重複することなく効果的な支援協力を実現するためにも互いの連絡調整が不可欠である。

5) 地域活動は継続がポイント、そのためには楽しみも必要

農地・水・環境保全向上対策とよく似た地域活動のグラウンドワークには「右手にスコップ、左手に缶ビール」という標語がある。地域活動に汗を流した後はビールのお楽しみを! という意味だが、活動後のビールに限らず先進地視察や交流会など、活動の継続には楽しみや充実感の要素が必要と思われる。

6) 無理のない参加協力の意向を持つ団体は少なからずある、仕組み作りが必要

インタビューの結果、生き物調査などであれば参加しても良いという意向を持っている団体が少なからずあることがわかった。このような団体は前もって連絡し日程調整すれば、活動に参加して貰える可能性が高い。

7) 農林水産省のネットワークを活用した支援協力への期待がある

事業所への期待を尋ねると、「先進地視察の紹介」「他地域の活動事例紹介」という声が多かった。国のネットワークを活用した他地域の情報提供を期待されている。

5. さいごに

留意点を整理してみると「常識的な事柄」が多かった。しかし、これらは単に知識として得たものではなく、支援活動を通じて実感したものである。平成20年度は今後の展開を左右する節目の年になるかも知れない。事業所としてもこれまでの経験を活かして庄内地域の発展に貢献できるよう努力したい。

(2008.3.31)